

乳がん高度検診・治療センター NEW一す NO.44

2018.1

ホルモン療法が有効な転移・再発乳がんに 新たな治療薬が登場！

乳がんの薬物療法には、大きく分けてホルモン剤治療（内分泌療法）、抗がん剤治療（化学療法）、分子標的治療があります。分子標的治療とはがん細胞の持つある特定の分子に狙いを定めて、その働きを抑える治療（乳がん高度検診・治療センターNEW一すNo.5参照）ですが、今回新たな分子標的治療薬としてイブランス（一般名パルボシクリブ）が市販され、注目を集めています。当院でも2018年1月より使用できる体制が整いました。

イブランスとは



正常な細胞では規則的に細胞分裂が繰り返され、一定期間の寿命を終えると自然に死滅していきます。しかし、いったんがん化した細胞では分裂を促すスイッチがいつでもはいった状態となり、無制限に増殖を繰り返します。

CDK4/6（サイクリン依存性キナーゼ4および6）は、細胞分裂を促すスイッチを入れる物質のひとつで乳がん細胞ではその働きが活発化しています。

今回登場したイブランスはCDK4/6の働きを抑えることにより、乳がん細胞の分裂を阻止し、乳がんの転移巣が大きくなるのを抑えます。

ホルモン剤と組みあわせて使用します

CDK4/6の作用は、女性ホルモンであるエストロゲンの刺激により増殖するホルモン受容体陽性乳がんでは活発になります。そのためイブランスは各種ホルモン剤と組み合わせて用いられ、単独では使用されません。組み合わせるホルモン剤の種類は患者さんが閉経前か閉経後かにより異なります。なお、イブランスはIV期の進行乳がんおよび再発乳がんの患者さんのみが、その治療対象となります。またHER2（ハーサー）陽性の乳がんは対象外です。

イブランスはカプセルタイプの飲み薬で3週間服用、1週休み、の4週間を1サイクルとして効果の出方を見ながら繰り返します。

イブランスの副作用



イブランスは乳がん細胞だけでなく正常な細胞にも影響を及ぼすため副作用が現れることがあります。特に注意すべきものとしては血液細胞、とくに白血球の減少やそのための感染症が引き起こされることであり、定期的な採血が必要です。それ以外にも、疲労感、脱毛、吐き気、口内炎、下痢などが起こり得ますが、こうした血液関連以外の副作用は通常軽微です。

なお、他の分子標的治療薬と同様に、イブランスもかなり高額です。ただ、同一月での医療費が一定額（自己負担限度額）を超えると「高額療養費制度」による医療費助成が受けられます。

さらに詳しくお知りになりたいことがありましたら乳がん高度検診・治療センターにお問い合わせください。また、高額療養費制度についての詳細は加入されている公的医療保険や当院でも相談に応じます。



乳腺外科 稲治英生

市立貝塚病院
TEL : 072-422-5865

